

Title	中村菊男君を憶う
Sub Title	
Author	手塚, 豊(Tezuka, Yutaka)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1977
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.50, No.8 (1977. 8) ,p.91- 93
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	追悼記事
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19770815-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中村菊男君を憶う

手塚 豊

去る五月十七日、私は、九段の大学の出講日であつたが、三田の研究室からの電話で、中村君急逝の知らせをうけた。私にとつては正に晴天の霹靂であつた。中村君は一昨年来、病氣勝ちではあつたが、最近は比較的調子がよいように見うけられたので、まさかこんなことになろうとは思わなかつたからである。

私が中村君をはじめ知つたのは、昭和十五年の春であつた。当時、中村君は政治学科予科三年生で、塾内文化団体連盟（文連と略称で呼ばれていた）日吉支部の常任委員であつた。私は大学予科学生課の学生主事補で塾生の文化活動の担当をしていたので、同君を知ることになつたのである。

中村君は伝書鳩研究会の幹事から文連の常任委員に選出されていた。しかし、同君は、伝書鳩を飼つていたわけではなく、文連の委員となるために同会に名目だけの籍を置いておられたのであつた。文連の仕事は、学内における一種の「政治」活動

であり、中村君はすでにその頃から政治運動に格別の興味をもつておられたように思われる。

この文連の会長は学生主事の井原紘氏であつた。井原氏は昭和二年に塾の経済学部を卒業後（小泉信三先生のゼミ）、大学院へ進むと共に、高島素之氏を中心とする国家社会主義運動に従事され、高島傘下の五人男の一人といわれた人で（井原氏のほか、石川準十郎、小栗慶太郎、神永文三、津久井竜雄の諸氏で、現在、津久井氏以外はすべて故人）、昭和八年に小泉塾長の招きで、義塾へ戻られ、高等部（社会思想）、大学予科（経済原論）で教鞭を採るかたわら、三田、日吉両方の学生主事であつた。その経歴が示すごとく、寔に異色の学生主事で、塾生達の信望も厚かつた（のちに主計中尉としてフィリピンで戦死された）。中村君もこの井原氏に私淑されていたから、思想的にも相当の影響をうけられたようである。のちに中村君が社会党から衆議院へ立候補され、また民社党支援の有力な学者メンバーの一人になられたきつかけは、そのあたりにあつたのかも知れない。

この年の秋、予科生の自治団体である予科会が懸賞論文を募集した。そして中村君が応募された「本居宣長の生涯と思想」は、見事に入選した。中村君は同郷（伊勢）の大先輩としての宣長を採りあげられたのであらう。選者の河上徹太郎氏は、その選後評で「宣長論」は、引用文の巧妙さと、やまと心への着

実な究明とで特に推薦するに価する」と述べている。この論文は「予科会誌」第二十二号（昭和十六年三月）に掲載されたが、中村君の流れるような筆致の片鱗は、すでに早くこの処女作の中にあらわれている。

学生主事補であつた私は、かたわら義塾商工学校で実業法規を教えていたが、前々から明治法制史に興味を持ち勉強をはじめていた。そしてしばしば拙宅を訪ねて来られた中村君と、夜を徹して「明治」を語り合つたものである。のちに中村君は、周知のごとく明治政治史に関する多くの業績を発表されたが、その方面への同君の関心は、すでにこの塾生時代からめばえていたものといえよう。

昭和十八年の秋、中村君は政治学科を卒業され、板倉卓造先生と米山桂三先生の推薦で法学部の助手となれると共に、文部省の特別研究生にもなられた。この研究生は兵役免除の特権があり、塾では他に経済学部鈴木諒一君と文学部の西垣誠人君であつた。この助手に残られるとき、私も中村君から相談をうけた。当時、中村君は郷里へ帰つて政治家たるの途を選ぶか、または東京に留まつて学者になるかで迷つておられたようである。私は、中村君の学才を以つてすれば、将来かならず学者として大成されることを信じていたので、同君に学校に残られることをすすめたのであつた。

翌十九年、私は空襲の被害をさけるため都内から市川へ疎開した。その頃、中村君も蒲田から高砂へ下宿を転居された。高砂の家は、同君の遠縁で農家であつた。中村君は自転車に野菜類を積み、江戸川を渡つて私の家へしばしば来訪された。食糧不足の時代のこととて、大変ありがたかつたことを記憶している。そして自転車にのられた若き日の中村君の姿が昨日のことのようにいまでも私の臉にうかんでくる。

昭和二十一年、戦後第一回の総選挙の折、中村君は三重県第一区から立候補された。このとき、法学部教授会は、同君を助手から助教授へ急ぎ昇進させた。これは同君が選挙戦にのぞむ立場を少しでも有利にするための配慮であつたと聞いている。

この粹な取計らいにもかかわらず、同君は惜しくも落選された。もしもこのとき当選されたとするならば、学者としての中村君はあるいはなかつたかも知れない。しかし、この立候補が、中村君の政治学研究に、貴重な体験的素材を提供したことはたしかである。

翌二十二年、私は大学予科教授から法学部助教授へ移つた。中村君の後任助教授である。中村君はこのことを大変気にかけておられたが、二十四年、新制大学発足のとき、私だけが法学部助教授の中から教授に昇進したので、中村君に大変喜んでもらつたことを覚えてゐる。

中村菊男君を憶う

内山正熊

その後、本年三月に私が定年で退職するまでの三十年間、私は法学部の同僚として中村君と親しい交際をつづけてきた。教授会その他において、中村君は学内行政に関し、同君独特の理論にもとづく正々堂々の議論をしばしば展開された。正論を主張する者が、一部の人々からけむたい目で見られることは、一般社会の通弊であり、学校という社会もまたその例外ではない。中村君の身邊に、そうした雰囲気があつたことは否めない。しかし、中村君が、その速筆を縦横に駆使してものされた夥しい分量の学問的労作が——それは一学者の業績としては驚異的分量である——わが法学部の誇りであることは、何人もこれを否定しえない厳然たる事実である。中村君の死は、法学部にとつては、寔にかけがえのない有力メンバーの一人を失つたことを意味し、いかに嘆いても嘆き切れない重大な損失である。

私より八歳も若い中村君であつたこととて、同君が私についての追悼文を書かれるとするならば寔に順当のことであるが、私が中村君の思い出話を書くことになるうとは、何という運命のいたずらであらうか。いまは痛恨の思いをこめて、ただただ中村君の冥福を祈る次第である。

(六月二十日記)

昭和十八年十月、中村君と僕とは同時に法学部助手になつた。いわゆる同期の桜である。ちょうどその頃、戦争は酷で、学徒動員で学生は殆んど姿を消して行き、戦時下の三田の山で、国民服にゲートルをはいて、われわれは一緒に助手生活を送つた仲間である。その彼は、僕より早く散つて行つた。

中村君は堂々たる体格で、当然軍隊に入るところだつたが、特に選ばれて文部省特別研究生となつたので、軍務を免れたのである。彼は、その恩師板倉卓造先生の御眼鏡にかなつて、大卒卒業と同時に助手となつた。板倉先生は、「中村君は筋がいい」といわれていたが、事実若い頃から政治学者として大家のような風格をもつていた。彼には、政治家ないし政治学者らしい資質が充満していた。談論風発、颯爽としていた彼は、程なく押しも押されぬ塾政治科の花形教授となつた。

助手時代のことだから、もう三十五年も前になる。あるとき、僕の家に遊びに来て、信夫淳平博士の「近世外交史」をも